【講　　演】文化ボランティアの変容を考える３つのキーワード
“参加”“サイトスペシフィック”“中動態”

さいたまトリエンナーレ２０１６ サポーターコーディネーター
（九州大学大学院芸術工学府博士後期課程 在学中）　藤原　旅人氏

皆さまおはようございます。藤原でございます。よろしくお願いします。
今日は、「文化ボランティアの変容を考える３つのキーワード　“参加”“サイトスペシフィック”“中動態”」というタイトルでお話をさせていただきます。
そもそも、なぜ私がここにいるかというと、2016 年にさいたま市で開催されました国際芸術祭さいたまトリエンナーレ 2016 で、サポーターコーディネーターとして携わりました。そうしたことからこの場に呼ばれたのではないかと思います。

今日は、まず柴田先生が先程お話になりました、アートプロジェクトや国際芸術祭についての説明、またこれらの活動に携わるボランティアはどういう活動をしているのか、最後に、実際に私がさいたまトリエンナーレ 2016 に関わった中で考えていることを最後のほうにお話したいと思います。

まずは簡単に自己紹介をいたします。現在、九州大学の芸術工学府の博士後期課程に在籍をしています。アートプロジェクトや国際芸術祭に携わっているボランティアやサポーターの人が、アート活動や文化活動を経ることで、どういった変化があるのか、どういった成長・学びがあるのか、という研究を行っています。学部ではフランス文学、修士課程では文化人類学、博士後期課程で芸術工学を専攻しています。

私とボランティア活動の出会いは大学２年生の時でした。私は演劇がとても好きで、もともと劇場で働くことを希望していました。大学は東京の大学に行きましたので、調布市せんがわ劇場というところに無理やりお願いし、学生スタッフとしてボランティア活動をさせていただきました。2008 年に世界的なアーティストの川俣正氏のプロジェクトに携わることで、美術館という場所ではなく、まちに出ていくプロジェクトに魅力を感じ、そこから日本各地の芸術祭のボランティアやサポーター活動に携わるようになりました。このプロジェクトは美術館の中で作品を展示するのではなく、美術館に来られた方に色々な作品のアイディアを出してもらい、そのアイディアの中から一つ選んで、それを本当に完成させようというものです。その時のプロジェクトは、小学校３年生の「普段は地面の上にある家が、地面の中にあったら面白いね」というアイディアに基づき、そのアイディアを実践するために真剣に穴を掘って、その中に家を作るということを１年がかりでやりました。このプロジェクトを進めていくなかで、多くのいろんな方が携わってくれました。
大工さんや、建築のプロの方、平日は市役所で働いている方や学校の先生など多岐に渡る方々が土日を中心に参加してくださいました。その方々に「なんで参加しているのですか」と聞いても、「いやー、何か分かんないけど面白いんだよね」という答えで、その何か、分かんないんだけどとは何なのだろうということを究明したくなり、研究者として実践者として現場に携わっています。

日本各地で色々なプロジェクトが行われています。今年は札幌国際芸術祭や、北アルプス国際芸術祭、奥能登国際芸術祭、さいたまトリエンナーレ 2016 など、各地で行われてい

ます。その中で、いろいろな芸術祭のホームページを見ていただくと、必ずボランティアの募集ページがあります。それは大がかりな芸術祭が多く、ボランティアの参加がないと回らないという現場の事情があります。

アートボランティアの特徴を説明します。

ここで言うアートボランティアとは、アートプロジェクトや芸術祭に関わるボランティアのことを指します。特徴の１つ目に、現在のアートプロジェクトの運営には、ボランティアの力は欠かせないことが挙げられます。極端なことを言うと、アートボランティアの数がゼロだと運営が回らない芸術祭も中にはあります。

２つ目は、誰でも参加可能であるということです。何か特技が必要とか、何か専門的な知識が必要かということはほとんどありません。気軽に参加できるというところが、どの芸術祭でも言えることで、そのハードルの低さがアートボランティアの特徴の１つと言えます。アートボランティア活動に参加し、活動を共にしていくなかで、他者との交流や、主体性を徐々に発揮していくという参加者が多く見られ、その過程において自尊感情や自己認識を獲得する場になっています。しかし一方で、誰でも参加できるというハードルの低さが、アートボランティア活動の質の低さに繋がり、アートボランティア参加者を単純な労働力として捉えてしまうと、そこに参加した人は何も変わらないことが多いです。この部分は、今回私が、さいたまトリエンナーレ 2016 のサポーター担当として携わる時に、特に気を付けた面です。

それでは、このようにアートプロジェクト、あるいは国際芸術祭というのが、なぜいろいろな地域で行われているかについて、考えてみましょう。

アートプロジェクトを簡単に説明しますと、アーティストがある地域に行きます。福岡を例にしますと、福岡にアーティストが来ます。そのアーティストが福岡の文化、歴史的文脈を学び、向き合い、その特性を作品に落とし込んでいきます。アーティストがその地域でいろいろなことをリサーチしていく中で、いろいろな人を巻き込んでプロジェクトを進めていきます。多くはボランティアとして参加している市民の方々ですが、本当にいろんな方々が作品制作に関わっていきます。プロジェクトを進める中で、アーティストと関わる地域の方々が議論をしていきます。そのプロセスの中で新たなコミュニティ、新しい繋りが生まれる場合が多く、その中で自分の役割や、自分の立ち位置などを確認していくことで、その人の新たなアイデンティティが確立していきます。このようにアートプロジェクトの特徴を挙げましたが、大きな特徴は社会包摂・共創の言葉で表せると思います。

一般にボランティア活動というと、自発性、無償性、公益性、もしくは創造性や先駆性などが動機として言われていますが、今回、私は３つの項目をピックアップしてみました。①自発性というのは自分で自主的に活動するということ。②無償性は無償ですること。③公益性は、豊かな社会を作るためにはどうすべきか ということです。しかしながらアートプロジェクトに参加しているボランティアの皆さんは、この３項目の動機で参加しているのではなく、自己実現・自尊感情・自己表現という参加動機の方が多いと思います。自分がなぜそこにいるのかを多くの人が探していて、その拠り所にアートボランティア活動があります。

もう１つ述べたいことは、先ほど柴田先生の使われた数字で、文化ボランティアの人数

が減っているというお話がありましたが、そもそも文化活動に無関心、無頓着、無防備な現状があるのではないかと考えています。大学院に所属していますが、特に学部の大学生を見ていると、文化活動に無関心な学部生が多く見受けられます。さすがに映画館に行ったことのない人は少ないと思いますが、美術館や博物館に行ったことがない人は多いです。劇場にいたってはほぼゼロです。これは文化資本という考え方で、フランスの社会学者のピエール・ブルデューが言っていますが、文化資本の考え方に沿うと、生きていく中で日常的な習慣の中に、劇場に通ったり美術館や博物館に通ったりという文化的な習慣は若者を中心に見ていくと、文化資本が乏しい状況下にあると言っていいと思います。これはやはりインターネット社会の影響が強く孤立化し、みんなスマホに常に向い合い、自己責任社会でなかなかSOSを出せないという現状と大きく関係があると思います。また、格差社会の蔓延というのもあります。社会人でいうと非正規労働であったり、ブラック企業というのがあります。その中で私たちが文化ボランティア活動、ボランティア活動をどう捉えればいいのでしょうか？しかしながら最近大学では、単位が認められる授業の中にインターンシップや、アクティブラーニングやワークショップを実施する大学が増えています。社会を学ぶ実践教育としても実施されているアクティブラーニングも、なかなか獲得が難しい実践で得る経験を重視して、実施している大学が増えています。さいたまトリエンナーレ2016の中でもインターンシップを３人受け入れました。また、アクティブラーニングとしては、４つの授業を埼玉大学と連携して実施しました。ワークショップにも複数回にわたり学生が参加をし、現場で得た実践を振り返る時間も持ちました。去年は、学生を授業の一環としてさいたまトリエンナーレ2016になかば強制的に連れて行きました。ワークショップは意外や学生にすごい人気で、そこから根付いてボランティア活動に携わり、いろんな役割を担ってくれる学生が増えましたので、取り組み方で変わってくるのではないかと思っています。

ここからさいたまトリエンナーレ2016の話に移ります。

トリエンナーレというのはイタリア語で「３年に１回」という意味です。さいたまトリエンナーレ2016は３年に１度開催で、次回は2019年の予定です。日本の状況を見ますと、２年に一度のビエンナーレ形式の開催のところもいくつかあります。さいたま市で初めての国際芸術祭で、３４組のアーティストによるアートプロジェクトとなっています。清水市長が、さいたま市にはJリーグのチームが２つあることが有名なように、これまでスポーツのまちとして知られてきたが、それを文化芸術まちとして展開したいということで、さいたま市文化芸術都市創造条例が2012年につくられました。その条例を大きく象徴するフェスティバルとして、このさいたまトリエンナーレ2016が位置付けられています。去年の９月２４日から１２月の１１日まで開催されました。さいたま市を生活都市として位置付けた文化芸術のフェスティバルで、柔らかい都市計画としてこのトリエンナーレを展開しました。

さいたまトリエンナーレ2016の作品を少し見ていきましょう。この作品はラトビアのアイガルス・ビクシェという作家の作品になります。実はこの上に電車が通っていて、アイガルス氏がリサーチにさいたま市に来た時に、電車に乗っているサラリーマンの数があまりにも多く、そのサラリーマンに焦点を当てて、作品を作りたいと言いました。顔をよく見

ていただくと仏様のような顔をしています。さいたまには、日本の企業を担っている沢山のサラリーマンが住んでいるので、その方々に敬意を込めゆっくり、リラックスしてほしいという思いでこのような涅槃像の体勢になっています。これは別処沼公園という所で、その公園の中に種船という船を浮かばせています。これは日比野氏克彦の作品です。

今回のさいたまトリエンナーレ 2016 の特徴が３つあります。１つ目はさいたま市の場所性にこだわるということです。アイガルス氏のサラリーマン像もそうですし、日比野氏の別処沼公園の作品もそうですが、その地域の特性を活かした作品になっています。
２つ目は共に作る・参加する芸術祭を目指した市民参加型のプロジェクトということです。先ほど述べた３４組の作家の作品の中で作品やプロジェクトに市民がサポーターとして関わってきました。３つ目は、その後も継続的な活動の萌芽を生み出すということです。

次に、さいたまトリエンナーレの中で、サポーターとして参加した市民がどんな活動をしたかをご紹介します。さいたま市の浦和駅近くにあるさいたまアートステーションがサポーターの拠点でした。この場所では議論や制作活動、最後にはサポーターの作品の展覧会を行いました。今回の芸術祭において、サポーターとして参加してくださる方に単純な作業ではなく、クリエイティブな作業をしてほしいと思いがありました。先ほども言いましたが、多くの芸術祭の活動は単純で誰もできる作業になっていることが多いです。そういったことではなく、サポーターにはクリエイティブな活動を期待していました。

さいたまトリエンナーレ 2016 のサポーターには重要な特徴が２つあります。１つ目の特徴は、全てゼロからはじめたということです。コーディネーターや運営側がこうした作業をしてくださいと参加者に言うのではなく、私たちに何ができるかということをじっくりと話し合うことからはじめました。２つ目は横の繋がりを重視しました。それはサポーター同士の繋がりです。この２つを推し進めるために、毎週金曜日の夜１９時から２１時迄毎週欠かさずサポーターミーティングということをしました。このミーティングは２月からはじめ、最初はお互いに自己紹介しながら、緩い参加者同士のつながりをつくるワークショップをしました。これは紙に自分がどういう人かという自己紹介シートを書いている写真です。次にさいたまという地域とサポーター参加者との関係性を探るワークショップをしました。具体的には、さいたま市に対してどう思うか、さいたまという地域に対してどんな思いを持っているかを書き出しました。これは今回のキーワードのひとつであるサイトスペシフィックという言葉に繋がっていきます。今回は全ての作品が新作で、さいたまの歴史的な特性や文脈に関係する作品をつくってほしいということをアーティストにお願いしてきました。そういうこともあり、まずは、サポーターの意識をさいたまの地域へ向けることをひとつの目標にしました。サポーターがさいたまに対してどう思っているかを議論してきました。この写真はそのワークショップのプログラムの中の１つで、自分の好きなさいたまの場所を写真に撮り、プレゼンテーションをし合いこちらの地図にぺたぺたと貼っていくという作業です。そうしたワークショップを行いながらさいたまという地域への意識を高め、サポーター同士の絆も強めていきました。

そうした中、ひとつのキーワードが浮かび上がってきます。それは「マイトリエンナーレ」という言葉です。これは、芹沢ディレクターのトークシリーズの中でアメリカのニューヨークでは、セントラル公園のことを「マイパーク」と呼んでいるという話がありまし

た。そして翌週のサポーターミーティングの中で、あるサポーターが私たちもさいたまトリエンナーレ 2016 をいかにして「マイトリエンナーレ」にするか考えようじゃないかという声が挙がってきました。これは現在でもサポーター活動における重要なキーワードとなっています。

毎週金曜日のミーティングの中で議論を深めていくうちに、徐々に参加者が増え、第１回目のミーティングは８名でしたが、４月から５月にかけて２０名位になりました。そして、このミーティングにアーティストや、その制作を担っているディレクターや、ディレクターチームのスタッフが次から次へと参加して、いろんな関係性が出来てきました。５月の中旬でしたが、サポーターの中から、自分は、子どもの造形教室を開いていて、子どもを対象にワークショップを開きたいとの提案がありました。その時はお互いにいろいろ知り合い、その人がどんな得意技を持ち、どんなことが好きなのかということが分かってきていた時期だったので、じゃあそれいいね、やっていこうと他の参加者の意見も取り入れながら実際の活動に発展していきました。

さらに参加者が増えて、５月頃から若い人の参加が目立つようになりました。２月にミーティングを始めた頃は４０代から５０代の方々が中心で、主催者のさいたま市側からも若い人とか、大学生をもう少し参加させてほしいとの声があがっていました。いろいろ手立てをした中で最も効果的だったのは、情報をいかに若い方々に伝えるかということです。それまでは紙媒体や、ホームページがベースでしたが、SNS を多用して、Facebook や Twitter に写真やミーティングの風景をのほほんと楽しい感じで載せたら、この写真や風景を見てミーティングに来た参加者も多く、そこから関係性がいろいろ繋がり、この時期のミーティングには４０人ぐらいが参加しています。会期が近づくにつれ、アーティストがミーティングに参加し、一緒に作品を作り上げる機会もありました。この写真は、その時の写真でチェ・ジョンファ氏という韓国出身の世界的アーティストと一緒に作品をつくった時の写真です。普段、会えないアーティストや、ディレクターがこのミーティングにたびたび参加してくれ、それが参加者の増える１つの要因になったと思います。

これは西尾美也氏の《感覚の洗濯》というプロジェクトで、多くの市民を巻き込んだ活動に展開していきました。こうしていくとサポーターの方も、この活動は結構自由で何でもしていいんだなと思ったらしく、この左側の T シャツは私の知らない間に非公式のキャラクターも T シャツも出来上がっていたという事例です。右上はさいたまトリエンナーレ 2016 の公式マークを模様にした旗です。こちらのファイルは３４組のアーティストやアートユニットが、彼らがこれまでどんな活動をして、どんなことを語ってきたかを事前に調べたい、リサーチしたいという声があり、そのインタビューをまとめたファイルで、作品の写真と共にファイル形式に集めたものです。

また、今回のサポーターはさいたまトリエンナーレ 2016 が初めての開催ということでもあり、情報がさいたま市民の皆さんに伝わっていないので、アーティストやディレクターにいろんな質問をするラジオ番組をつくりました。これはアーティストとラジオの収録をしているところです。また、これもすごく面白いなと思ったのは、さいたま市はいろいろな市民活動やまちあるきの活動が盛んな地域で、その方々とサポーターが連携をして、さいたまの歴史的な場所や歴史的に特徴のある場所を回りながら、「さいたまトリエンナー

レの展示会場を回る」というまちあるきツアーをしました。お互いに良い連携になり、会期中に４～５回しました。この写真は今回のさいたまトリエンナーレ 2016 を象徴する写真として私が良く使っています。右側の方 芹沢高志氏で、左側の方がサポーターとして大活躍をした矢ヶ崎健治氏です。芹沢氏はさいたまトリエンナーレ 2016 の公式のディレクターですが、矢ヶ崎氏は関係者からローカルディレクターと呼ばれていました。矢ヶ崎氏はサポーターとして参加をし、作品やプロジェクトに最も関わった方です。市側やスタッフからも矢ヶ崎氏にはテープカットをしてもらわないと駄目だろというお話になり、お願いをしてテープカットに参加していただきました。

単純な作業は嫌だと言いましたが、逆に単純な作業や決められた枠の中で活動をしたいという参加者の方もいます。その方々には会期中に会場の中でお客様のおもてなしや、さいたまトリエンナーレ 2016 の情報をお伝えするという役割を担っていただきました。この会場内で活躍していただくサポーターのことを会場サポーターと言い、会場サポーターとして参加していただく方にはレクチャーを受けていただくことが活動条件でした。

自主的なサポーター活動は更なる展開を遂げていきます。またまたサポーターが勝手に動き出した例として、他の文化活動や市民活動をしている方々との連携を目的とした「未来トークさいたま」を１０回ほど企画運営しました。この「未来トークさいたま」は次回（2019 年）を見据えた活動で、もう既に活動されている団体の方をゲストにお迎えし、その方の活動のお話をお聞きしつつ、2019 年の次回のトリエンナーレでどんな連携や活動の展開ができるのかということを話しました。これは毎回違うサポーターにモデレーターを担ってもらい、とても面白いトークの時間になりました。未来トークさいたまプロジェクトの素晴らしい点は、単なるイベントとしてのトークを開催したということに終わるのではなく、きちんと文字媒体として冊子にまとめています。今回は市民参加型の作品が多く、作品制作に多くのサポーターが携わりました。作品やプロジェクトに携わった方がその作品やプロジェクトに対し、どういう感想や印象を持ったのかを記録に残したい話というがサポーターの方から出て来ました。予算が全くなくどうしようかと考えた時に、流行りのクラウドファンディングという方法を思いつきました。これは多くの方々に思いを共感していただき、ファンディングでご寄付をいただくというシステムです。設定金額は４０万円でしたが５６万円も集まりました。サポーターのミーティングは毎週金曜日でしたが、この記録集を作るサポーターの編集ミーティングは毎週日曜日に行っています。記録集を作りたい有志が集まって、議論をかわしています。六月に入稿記念パーティをして、まもなく入稿します。クラウドファンディングでファンディングしてくださった方にお礼として贈り物をします。その中で地元の地ビールとの繋がりだとか、私もすべて把握できているとは言えないくらい沢山の展開がありました。これが出来つつある記録集の一部で、１２月には出来上がるのではないかと思っています。記録集はサポーターの中にデザインが得意な人や、出版会社につとめている方が中心となり、記録集のプロジェクトを進めています。何かしらの得意技を持っている方々も、初め頃のミーティングでの自己紹介では、皆さん自分の素性は明かしません。それが１か月、２か月と付き合っていくと、「実はデザインできます」とか、「文字の編集が出来ます」と言う人が出てきます。その関係性をいかに構築していくかというのが重要なのではないかと思います。

さいたまトリエンナーレ 2016 のプロジェクトで、JACSHA（日本相撲聞芸術作曲家協議会）の作曲家３人組のアートユニットがいますが、さいたま市岩槻区という もともと相撲文化があった場所で、演奏会を兼ねたまちあるきツアーを開催しました。予想以上に地域の人に受け入れられ、サポーターの中でも盛り上がり、１０月半ばに今年も同じような規模のプロジェクトを、市民の手で開催をしたいという話が今も続いています。また明後日さいたまという活動があります。アーティストの日比野克彦氏が全国で推し進めているプロジェクトにサポーターとして参加している市民の中に、私たちもさいたまの中で活動したいと共感する方が１０人～２０人いました。この明後日さいたまの活動は朝顔を育てることを、各家庭やその地域の拠点で育て、その過程で新しいコミュニティや、人と人との繋がりを構築していくプロジェクトで、全国でプロジェクトが展開しています。今年６月にこの明後日朝顔の全国大会がありました。去年育てた朝顔から採れた種で特徴的な、大きい種や、変わった形の種を全国の地域から１つずつ出し合って、優勝者を決めるというものです。さいたまチームも初めて出場し、見事全国優勝をしました。来年はさいたまで全国大会を開催するので、活動も更に勢いづいていくのではないかと思っています。現在の活動として､毎月最終週の金曜日に2019年のさいたまトリエンナーレ2019開催に向け、サポーターができることは何なのか、前回の反省を踏まえて、いろいろとアイディアを練っています。

ここからまとめに入りたいと思います。今回お伝えしましたのは、アートボランティアの活動の可能性ということで３つのキーワードを出しました。「参加」・「サイトスペシフィック」・「中動態」という考え方です。

まず１点目が「参加」です。今回、さいたまトリエンナーレ 2016 で望んだのは、消極的・受け身的な参加ではなく、緩やかに参加して、自分のやりたいことを当事者として活動してほしいと思っていました。ボランティア活動への参加は、参加者にとっての居場所や仲間づくりへと展開していくこともあります。アートプロジェクトのサポーターやボランティアの参加者を見ると、積極的な方もいらっしゃいますが、中には精神的に病んでいたり、少し助けを求めている方もいらっしゃいます。そういう意味でも緩やかでいろんな関係をつくる場所になれば良いなと思っています。アートボランティア活動の中で他者からの評価や承認を得て、自尊感情を獲得し、自己実現から自己表現へと発展していきます。その中で、各個人が持っているクリエイティビティ（創造性）を発揮できる場になることを期待しています。誰もがクリエイティブという創造的な力を持っておられると私は信じています。意外な方から面白い活動や、こんなことをしたいと、発言があった現場ももう何度も見て来ています。そのような面白い活動に展開する場になればいいと思っています。

２点目が「サイトスペシフィック」です。さいたまトリエンナーレ 2016 のコンセプトもそうですが、場所性へのこだわりです。その場所ならではの、空気、景観、日照、気流、雰囲気、アウラがあると思います。場所の特性、歴史的文脈、どういう人が参加しているのかなどいろんな要素があります。プロジェクトを進める中で、どういった議論や対話があり、どういう思考に繋がったのかをアートプロジェクトは重要視します。その場所に帰属する営み全体の価値体系であり、そこに至るまでの過程が重要です。

まさにその場は一瞬、一瞬でしか成り立たないもので、そこに成り立つ関係性や、営みを

重要視した関係というのがプロジェクトや活動を支えていきます。

３点目は「中動態」です。中動態という考え方に最近注目しています。これまでの近代社会は１つの自律的な主体を重要視してきました。ボランティア活動でも、積極的に活動の中心やキーとなる人を求め、そういう人にいかに参加してもらい、核となってもらうかということを現場では議論してきました。最近、他者との関りの中ではぐぐむ意思が重要ではないかと思っています。まさに、さいたまトリエンナーレ 2016 の毎週サポーターミーティングでは、必ず参加者全員に自己紹介をしていただきました。毎回参加している人も必ず自己紹介をしてもらいました。自己紹介というのは創造的で、クリエイティブな活動の第１歩だと思っています。自分を如何に他者に紹介し、伝えるか、ということは簡単なようで難しいことです。自己紹介することで、一緒の席に連なっている人や、活動を共にする人たちのことが分かってきます。そこから展開して、他者を認め、他者が発している意見を認めることを寛容性といいます。この寛容性がその集団の中で出てくると面白い活動がいろいろと飛び出してきます。そして、いろいろなアイディアに、じゃあそれいいじゃん、やってみようよ の声が出てくると、プロジェクトが一気に進みます。他者との関係性は、自分が１人で頑張るより、他人と意見を言い合い、対話や議論をしていくなかで、意志でもない依存でもない、単なる傍観者や表現者でも、観客者でもないところから面白い意見やアイディアが出てくるという考え方です。その無意識に出てくる意思が中動態です。

するでもない、されるでもない中で育まれた関係性は、文化ボランティア活動や、社会全体でも生まれ、そして社会を豊かにしていくと考えています。文化ボランティアの可能性は中動態としての社会スタンスにあり、他者との関係性の中で芽生えていく主体性だと思っています。自律的な主体を持った行為ではなく、他者との関係性の中から生まれ、育まれる行為です。それは他者からの影響も受けつつ、その過程の中で自分の意思を育んでいくことが、これからの自己責任社会、孤立社会を克服し、お互いさま、おかげさまの互助共助、公助、相互扶助の世界観と云う、ひとつレベルの違う新しい世界へと進んでいくと思います。その関係性がうまくいくと、他者が自分を認めることがおこり、自分が自分自身を認める自己認識や自己実現に繋がります。また自分のクリエイティブなことを表現したい欲望や、積極性が生まれ、その中で自己獲得へ繋がっていくのではないかと思っています。

以上、文化ボランティアの変容を考える３つのキーワード、“参加”、“サイトスペシフィック”、“中動態”のことをお話ししました。

アートプロジェクトや、国際芸術祭のサポーター、ボランティア活動のお話なので、文化ボランティアの活動とは傾向が少し違うかもしれません。しかしながら、大きく見ると、アートプロジェクトのボランティアも文化ボランティアも、お互いに学びあえると思っています。まず、中動態の関係性を構築するには、他者との会話や対話であり、議論が大事になってきます。このフォーラムの素晴らしいところは一方的にお話するのではなく、午後に議論の時間があることです。その中で皆さんの意見も聞きながら、何か新しい議論や関係性ができれば良いなと思っています。私からは以上になります。長い間ご清聴ありがとうございました。